

一貫した「パレスチナ消滅策」のなかのガザ侵攻

田浪亜央江

ガザ・絶望的な希望

一三年前の一九九六年一月、私は初の大統領選および評議会選に湧くパレスチナの人びとの姿をこの目で見ようと、留学先のシリアから密かにパレスチナ入りした。どの町に行く？ エルサレムに着くと、私はほとんど迷うことなく、ガザに向かう乗り合いタクシーに乗り込んだ。イスラエル占領下で生きて来たパレスチナ人、とりわけキャンプの住民たちの苦難のほどを比較することなどできることではないが、ガザの状況は、やはり被占領地全体の中でも特殊と言わねばならない。種子島よりさらに小さい三六〇平方キロの土地、さらにその四〇%以上がユダヤ人入植地として囲い込まれ、八つの難民キャンプに数十万の人びとがひしめき合うように暮らしてきた。拷問の跡を持つ瘦せた青年、イスラエル兵に殺された幼い息子の写真を指差す母親、一〇人以上の子どもたちが重なり合うようにして眠る一間の脇で、水タバコを順番に回しながら長い夜を過ごす男た

ち、彼らがついに選挙権を持ち、自分たちの大統領と議員を選ぶのだ！

私がこの選挙を見ておきたいと思ったのは、初の選挙の高揚感をガザの人びとと分け合いたかったからではない。九三年のオスロ合意直後の短い浮かれ騒ぎが終わると、情勢は次第に、目に見えて悪化していった。イスラエル国内で自殺攻撃が起こるたび被占領地は封鎖され、人びとはイスラエル国内での仕事を失っていった。オスロ合意がパレスチナの最終的な地位も難民の処遇も、すべて先送りになっていることが、ようやくパレスチナの一般の人びとも理解されはじめていた。その延長線にある評議会選挙に乗って、喜んでいて大丈夫なのかと問い詰めた気持があった。さらに言うなら、シリアにいた私は、シリア国内にいるパレスチナ難民たちが、国外難民を置き去りにしたまま被占領地で行われる選挙に反対するのを見てきた。この選挙は被占領地の人びとの目を現実の矛盾から一時的にそらし、パレスチナ人を分断するだけだ。そう心の中で何

度も確認しながら、それでも私は、ガザの人びとがどのよう選挙の日を迎えるのかをともかく目撃しておきたいと思っただけだ。

投票日の数日前にガザに着いた私は案の定、将来の不安など考えたくもないというような、ガザの人びとの底抜きの楽天主りを目にした。彼らはけっして浮ついていたりわけではない。まったく不完全な私たちでありながら、自分



1996年1月20日、ガザのラファハで、初のパレスチナ評議会選挙の投票所に集まった女性たち（撮影：田浪亜央江）

たちの国が将来作られる、その第一歩としてこの選挙を受け止め、社会の一員としての責任を果たそうとする地域リーダーたちや、伝統の束縛の中で思い通りに行かない現実と折り合いをつけながら、活動の場を見いだそうとしている女性弁護士もいた。「問題があるのはわかる、で

もこれが第一歩。良い生活を目指し、ともに国を作っていくために頑張りたい」。真剣な表情で、異口同音に語っていた。そうだ、ガザの人びとは、もはや待てなかったのだ。終わらない占領にうんざりだったのだ。世界中の人間が自由に自分たちの生き方を決めて生きているのに（少なくとも彼らにはそう見えた）、なぜ自分たちだけがこんな暮らしをしていなくちゃならない？ もう終わりだ、国を持つんだ！

それはイスラエルがエルサレム近郊で急ピッチに入植地を造成し、占領の既成事実化を進めているさなかで、「占領からの解放」や「自己決定」の瞬間を大急ぎで一度でも味わっておこうと何かに急かされている姿のようにも見えた。「別の現実」への彼らの渴望、必死さを、誰が批判などできよう。それは絶望的な希望だった。

私が最後にガザを訪れたのは二〇〇〇年の春だ。彼らの苛立ちはずでにピークに達しているように見えた。最初に会ったときはまだ少年だったハミードは学校を出て何年にもなるのに、まともな仕事を得られず、結婚生活もうまく行っていないかった。別の家では、失業状態の夫に愛想をつかした妻が、赤ん坊だけを連れて実家に戻ってしまっていた。母親に置いて行かれた子どもが、背丈よりも長い箒でキャンプの中の家を掃いていた。ほとんど口をきかないその女の子の大きな目を見つめながら、何もできない私がい

ここ来ても邪魔になるだけだと思つた。父親は家の外でしゃがみこんだまま、鳥かごの小鳥のくちばしに指先を近づけたり遠ざけたりしていた。

何とということだろう。すでに待ち切れずにいたはずのガザの人びとは、「パレスチナ国家建設の第一歩」という壮大な茶番のあと、その後一〇年以上にわたって失業と生活の悪化、家族の不和、閉塞感というだけではあまりにも不十分な、どこにも行き場のない日々の耐え難さを、じつと生きるしかなかったのだ。私はもはや報道を頼りに想像するしかない。二〇〇五年夏、イスラエルがガザを一方的に放棄したときには、せいぜい爽快な気分くらいは味わえただろうか？ ハマース政権が誕生したときは、久しぶりに意気を揚げるのができただろうか？ ガザの人びとから、私は恩恵を受け取るだけ受け取っただけで、彼らのために何をするともないままに、この時間を過ごしてきたのである。

二〇〇八年一月以降のガザの完全封鎖による兵糧攻めのなか、彼らはいつ終わるとも知れない空腹や寒さ、暗闇のなかで、世界中から見捨てられたことへの怒りと絶望感をどんなに持ち続けたことだろうか。

一五年にわたる封鎖

ガザ。この場所を私たちはほぼ南北に細長い土地として

イメージするが、それはもともと何か自然の境界によって区切られた場所ではない。一九四八年以前のガザは、北部が大きく膨らんだ逆さ瓶のような形をしており、古代から商業で栄えていたガザ市と、それより北部に点在する四五の小さな村を含む地域だった。

一九四七年の国連によるパレスチナ分割案で、この歴史のガザの北部地域は、大部分が新生ユダヤ国家に含まれることになってしまった。ユダヤ軍による強制的追放政策がはじまると、ガザ市および南部の細長い地域に、およそ二〇万人の難民が流入した。第一次中東戦争後、ここはエジプトの支配下に置かれることとなり、「ガザ回廊 (Gaza Strip)」と呼ばれる場所が生まれたのである。

一九六七年、奇襲攻撃で第三次中東戦争を起こしたイスラエルは、ガザやシナイ半島を含む広大な土地を占領する。被占領地がイスラエル商品の市場となるとともに、占領下の人びとはイスラエルに出稼ぎに行くようになり、被占領地の経済はイスラエル経済に従属する。差別的で違法な労働環境下で働かされたとはいえ、イスラエルへの出稼ぎによってガザの人びとの収入は増大し、イスラエルもまた安価な労働力を利用して経済成長を遂げてゆく。

ところが湾岸危機と湾岸戦争を通じ、PLOがイラク寄りの姿勢を示すと、湾岸諸国で働いていたパレスチナ人たちは雇い止めをくらう。湾岸からの送金は激減し、パレスチナというパートナーを置き、その相手と「共存」しなければならなくなつたと見るや、イスラエルはその相手をパートナーとしてはい物にならないように弱体化させ、一方的に切り捨てる方向へと切り替えたのである〔1〕。

詳しくは別の機会に譲りたいが、他方でオスロ合意によって中東の穏健諸国との関係正常化を目指していたイスラエルの労働党政権は、外国人労働者を受け入れつつグローバル化と新自由主義の進展の波に乗り、イスラエルが主導する「新しい中東」を創出することを構想していたのである。イスラエルへ出稼ぎに出ているパレスチナ人は一二万人、そのうちの約半数は職を失い、パレスチナ経済はガタガタになつた〔2〕。

一般的にはイスラエルが上記のように、占領地を封鎖し、労働者の移動を制限したのは、占領地から持ち込まれる暴力を封じ込めるためだったと説明される。しかしさらに言うならば、イスラエルがパレスチナ人労働者をイスラエル国内から閉め出したのは、むしろオスロ合意そのものの帰結なのである。占領地のパレスチナ人を3K労働の担い手として利用しつくしていた時期には、まったく不平等ながら相互に利益をもたらす関係が成立していた。しかしオスロ合意によって建前としてだけでもパレスチナ側に自治政

二〇〇五年、入植者とイスラエル軍は、国内の右派の反対の中でガザから撤退する。入植者の抵抗を退けてシャロンが強硬的に実行したこともあり、世界中で「和平への第一歩」「中東和平プロセスの前進」といった誤った報道がなされた。しかしこれが、ガザの入植地を維持する経済的負担を取り除き、西岸地区の一層の占領固定化を目指すものだということは、少し調べれば誰にでも分かることだった。さらに、今となってみればこれが、今回のイスラエルのガザ侵攻のための巧妙な布石だったと見えるのは自然である。イラン・パペの言葉を借りるなら、イスラエル軍にとって入植者の存在が「パレスチナだけに標的を絞って

残酷な手法で報復攻撃をおこなうための妨げ」になっていったからこそ入植者は移動させられたのであり、「むしろガザ地区に対するその後のあらゆる軍事行動を容易にし、西岸地区への支配を強化するためのもの」だったのである〔3〕。

パレスチナ社会の消滅を狙うイスラエル

二二日間で一三〇〇人以上のパレスチナ人を殺し、五四〇人以上の負傷者を生み、四〇〇棟の家屋を完全半壊させた今回の戦争は、そうした数字では決してとらえきれない被害をガザにもたらし、ガザの社会を滅茶苦茶に破壊しつくした。マスコミやジャーナリストの立ち入りがあったく不可能だったにも関わらず、現地の人びとが発信し続けた文章や画像によって、具体的な被害のいくばくかを私たちは知ることが出来た。被害の実相を知ることの重さを改めて感じた人も多かったのではないか。何しろイスラエルのテレビにはガザの子どもの死体の映像など一切映らず、国防軍の活躍ぶりや若い兵士とその家族の物語ばかりが垂れ流されたのだ。

ここでは開戦にあたってのイスラエルの狙いと、今回の戦争がイスラエルにとってどういう意味があったのか、いくつかポイントを挙げておきたい。まず、今回の戦争の目的がハマースからのロケット弾に対する防衛であるという

イスラエルの主張だが、これは完全に嘘であり、口実に過ぎないという点だ。二〇〇五年のガザ撤退のさいに、イスラエル指導部がどこまで明確に将来のガザ攻撃を射程に入れていたのかについては、私自身は判断する材料を持たない。しかし、イスラエルは少なくとも二〇〇七年の六月から、ネゲブ砂漠のツェヒリム基地で、ガザにおける地上戦の準備のため訓練を開始していたのである〔4〕。より直接的な材料を求めるなら、二〇〇八年の六月または七月、ハマースとの停戦交渉を開始した一方で、イスラエルのエフード・バラク国防大臣がガザへの侵攻準備を国防軍に命じていたことを、開戦後、イスラエルのメディアでさえ報道していることを見つけ出せる〔5〕。

口にするのもおそろしいことだが、イスラエルにとって究極の目的は被占領地のパレスチナ社会の消滅であり、軍事的手段か非軍事的手段かということは状況と影響のシミュレーションを通して選択されているに過ぎない。西岸からのテロリストの侵入を防ぐためという口実で西岸地区に分離壁が建設されたが、それはパレスチナ社会全体を疲弊させ、パレスチナ人にとって住むに耐えられない場所にする目的と効果を持っている。今回の侵攻のように短期間で大量の人命をむごい手段で奪っていくだけでなく、この前も後も、さまざまな手段の組み合わせによってパレスチナ社会の弱体化を進め、崩壊させて行こうとしていること

に変わりはない。

こうした政策全体のなかでは一要因にすぎないが、二〇〇〇年にBG（英国ガス）によって発見されたガザ沖合の天然ガスの利権確保の狙いについても指摘され始めている。同社とCCC（コンソリデイトド・コントラクターズ・インターナショナル社）は一九九九年にパレスチナ自治政府と契約を結んでいるにも関わらず、ハマース政権誕生後、イスラエルは強引に、BGに対して新たな契約案を提示した。「テロ組織」が直接収益を得るのを阻止するた

備を命じた同じ月に、BGと契約を結んでいる。二〇〇五年のガザ撤退後もガザの制海権と制空権を握ってきたイスラエルが、ガザ侵攻後、一方的に海洋主権宣言に踏み込みガス油田を接収する可能性も示唆されているのだ〔6〕。最後に今回の侵攻とイスラエル社会との関わりについて簡単に触れておきたい。今回の侵攻で、イスラエルで一人規模の反戦デモがあったことはよく引き合いに出されたが、あえて言えばこの程度の少数派は、いて当たり前なのである。むしろ、二〇〇六年のレバノン戦争の時に比べて

めという無茶な論理で、イスラエルのアシケロンにパイプラインを通し、イスラエルがガス供給を管理するというのである。カナダのシンクタンク「グローバルウォッチ」の記事によれば、イスラエルは軍にガザ侵攻の準



撮影者不詳（パレスチナ人ジャーナリスト、サリーム・アブー・ジャバル氏より入手したもの）

ずっと、反戦運動の影が薄く、国民のほとんどがガザ侵攻を熱狂的に支持したことが、全体の動向としてはそれほど重要である。私自身は、シオニスト左派でレバノン戦争にも反対していた知人が、「今回ばかりはイスラエルの正当防衛だ」と言い出し、短期的には悲惨なことが起きるにせよ、ハマースを解体させることこそが長期的な中東和平に貢献することになるのだと真面目に主張するのを目にした。

イスラエルの中央選挙管理委員会は戦争中の一月二日、極右政党「我が家イスラエル」と国家宗教党の動議で、イスラエルの国会内に議席を持つ二つのアラブ系政党の選挙参加資格の剥奪を可決した。この二党は元共産党員やインテリ・学生などの支持の多い「民族民主主義会議」とイスラム運動系の「統一アラブリスト」だが、国家が「テロリスト」と闘っているさなかにそれを批判し、「レイシズム」を振りかざしているというのが動議の理由だった。両党は即時に裁判に訴え、イスラエル高等裁判所は選挙管理委員会の措置を無効としたものの、こうした機会を確実に利用しながら、イスラエルの排外主義はいっそう存在感を増し、力を得てゆく。六七年の占領地獲得以来進展してきた、こうしたイスラエル社会の変質に耐えられない人間は、この国から出てゆくしかないだろう。ますます熱烈なシオニズム支持者と排外思想の持ち主がイスラエルの国民とな

り、社会の主流にのし上がっていく。これはイスラエル自体にとっても悪夢ではないか。二月一〇日の国会選挙の結果を注視しながら、今イスラエルをどうにかしないかぎり、世界全体がますます悲惨な方向に向かうことは避けえないことを確認したい。

(二〇〇九年一月二七日)

【注】

[1] イスラエルによる占領政策の変化とガザの社会経済状況については、Sara Roy, "Falling Peace, Gaza and the Palestinian-Israeli Conflict", Pluto Press, 2007を参照。

[2] 被占領地のパレスチナ人がイスラエル国内の労働市場から完全に閉め出されたのは、二〇〇〇年から始まった第二次インティファダ以降である。

[3] イラン・パペのオフィシャル・サイト (<http://ianpape.com>) の "Israel's Message" より。翻訳がウェブ上に上がっている。「イラン・パペ」まず彼らを柵で囲い込み、そして、……」(早尾貴紀訳) <http://palestine-heiwa.org/news/200901151417.htm>

[4] <http://www.press.tv/detail.aspx?id=80708§ionid=351020202>

[5] <http://www.haaretz.com/hasen/spages/1050426.html>

[6] <http://www.globalresearch.ca/index.php?context=va&aid=11680>

(たなみあおえ／パレスチナ／イスラエル研究、ミードン〈パレスチナ・対話のための広場〉運営委員)